

新潟のキリスト教学校の歩み

—その芽生え、消滅、復活—

●わが大学史の一場面—日本の近代化と大学の歴史
山田 耕太 ●敬和学園大学副学長

一 新潟のブラウン塾、キター塾

敬和学園の第一の精神的な前身は、一八六九年一月に新潟に来た米國オランダ改革派のS・R・ブラウン宣教師夫妻とM・E・キター宣教師の私塾にまでさかのぼる。ブラウンは、一八六九年二月から新潟・古町の不動院で開校した官立新潟英学校の英語の教師として英語を教えた。ブラウンの娘が新潟のイギリス領事のラウダーに嫁いでおり、新潟開港に続いて官立新潟英学校設立の話聞いて、自分の父親を斡旋したことによる。ブラウンは、キリスト教の宣教師としてではなく、英語教師として夫人と同じ教会員のキターを伴って新潟に着任した。

ブラウンは、翌年三月ごろから日曜日に自宅の宣教師館でバイブル・クラスを開いて希望者二人に聖書を教え始め、同じころにキターは、ブラウン夫人と共に平日に自宅の宣教師館で裁縫や家事などの女子教育を始めた。だがその当時は、まだキリストン禁制の高

礼が出されていた時代であったので、ブラウンは聖書を教えたかどで新潟英学校を解雇され、七月に夫人とキターと共に横浜に戻った。

新潟英学校の生徒でバイブル・クラスに出ていた阿部欽次郎や真木重遠ら六人は、ブラウンを慕って横浜へ同行した。阿部欽次郎は、のちに新潟女学校と北越学館の創設に携わった。長岡出身の真木重遠は、ブラウンより洗礼を受け、新潟県人で最初のキリスト者となり、新潟・上田・青森などで教会設立に尽力した。

新潟英学校でブラウンのもとで学んだ藤沢利喜太郎は、のちにベルリン大学やストラスブール大学で理学博士となり、帰国して東京帝国大学で数学を教えた。横浜のブラウン塾は東京一致神学校を経て明治学院へ、横浜のキター塾はフェリス女学院へと発展していった。

二 パームの医療宣教

エディンバラ医療宣教会から派遣されたパーム宣教

師は、一八七五年四月に新潟に来て、八年五月にわたって西大畑のパーム病院（現在の北方文化博物館新潟分館南隣、金井文化財館のところ）ほかで医療宣教にあたった。パームを助けた人々には、大和田清晴・虎太郎父子のような医師と押川方義と吉田亀太郎のような伝道者がいた。パーム病院は医療活動を行うばかりでなく、伝道者養成の神学塾のような側面も兼ねていた。パームが始めた「新潟公会」は、パームが新潟を去ったのちに、一致教会に加わった新潟日本基督教会（現・日本基督教団東中通教会）と新潟第一基督教会（現・日本基督教団新潟教会）に分かれたが、パームの医療宣教活動は新潟県のプロテスタントの諸教会の背骨を形成した。

押川方義と吉田亀太郎は、一八八〇年八月に起こった新潟大火をきっかけにして宮城県石巻や仙台に転じ、日本のスコットランドとして東北各地に教会を建てていった。押川方義は一八八六年に仙台神学校と宮城女学校を創立したが、それらは東北学院と宮城学院へと発展していった。

三 新潟女学校・北越学館の開校と休校

敬和学園の第二の精神的な前身は、新潟女学校と北越学館である。パームが新潟を去ったのちにアメリカン・ボードがそれを引き継いだが、医療宣教から教育宣教に活動方針を転換させた。阿部欽次郎は工部大学校（東京大学工学部の前身）を中退して新潟に戻り、自分が建てた私立新潟英学校の生徒

も建物も新潟女学校と北越学館にささげた。

成瀬仁蔵は、一八八六年八月に新潟第一基督教会の初代牧師として赴任した。一八八七年五月二日には新潟堂所跡を仮校舎として、「婦女に固有する天賦の美性を発達せしめ、智徳兼備の良女善婦の養成」を目的とする新潟女学校を開校した。のちに本校舎は、南浜通二番町のパーム病院跡地に移った。新潟女学校では、毎朝三〇分間の礼拝から一日の授業が始まり、英語に力を入れた教育を行った。成瀬は二年間、新潟第一基督教会の牧師をして校長を兼務したのちに、牧師を辞して新潟女学校の校長に専念した。普通科目のほとんどは成瀬が教えたが、成瀬夫人とスカッター姉弟らがそれを支えた。成瀬はその後、アメリカ留学を経て帰国後に、梅花女学校校長を経て、日本女子大学校（日本女子大学の前身）を創設した。

他方の男子校に関して、加藤勝弥が初代館長となり、寺裏通り一番町の旧私立新潟英学校を仮校舎として、一八八七年一〇月一五日にキリスト教主義教育と英語教育を柱として、「英語ヲ以テ高等普通学科ヲ教授スル」「生徒ハ凡テ毎朝七時三〇分ヨリ八時マデ公会〔すなわち礼拝〕ニ出席シ、道育〔すなわち徳育〕上ノ講話ヲ聴ク事ヲ要ス」という教育方針のもとで北越学館は開校した。のちに学校町二番町（現・県立新潟中央高校の場所）に本校舎と寄宿舎と食堂が建てられた。一八八八年九月には、空席だった教頭（すなわち校長）として、新潟襄の斡旋で新潟と同じくアーモスト大学を卒業

して帰国した内村鑑三が着任した。だが内村は、二月には宣教師の宣教方針と対立して北越学館事件を引き起こし、辞任した。その後任として松村介石が二代目教頭となり、それは二年半続いた。

新潟女学校と北越学館は、一八八九年に大日本帝国憲法が発布され一八九〇年に教育勅語が制定され、自由民権運動が抑えられて下火になり、欧化主義から國粹主義に急転換していった試練の時期に、宣教師の転出や内部の政治的対立、地元有力者の離反などのさまざまな要因が絡んで、一八九三年四月に休校に追い込まれた。五年半の北越学館の教育からは、五泉出身の伝道者木村清松、五十公野出身の東北学院第三代院長出村悌三郎、上館出身のダンテ研究家山川丙三郎などの逸材を輩出した。彼らは、新潟から歩いて仙台に向かい東北学院に編入した。

さらに一八九九年、学校で宗教教育を禁じた文部省「訓令第一二号」が出された。この時期に全国で六七校あったミッション・スクールの中で二六校が合併・閉鎖に追い込まれた。この試練の経緯から、一九一〇年に基督教教育同盟会（現・キリスト教学校教育同盟）が結成された。

四 大正デモクラシーの時代

大正デモクラシーの思潮のもとで、新潟教会の長田時行牧師が一九一九年一月に教会堂を仮校舎として聖友女学校を開

校し、一九二四年一〇月に東中通二番町に校舎を新築移転し、一九二七年五月に聖友高等女学校として拡充したが、昭和初めの軍国主義化の波に勝てず、一九三〇年四月に閉校した。また、一九二二年から一九三〇年まで続いた木崎村（現・新潟市北区）の小作争議で、地主に反対して木崎・横井・笹山・早通の小学生約五〇〇人が同盟休校し、一九二六年には木崎に無産農民学校という農民小学校を開校したが、四カ月後に和解除閉校となった。だが、それは新潟高等農民学校として引き継がれ、一九二八年まで存続した。これはキリスト教学校ではなかったが、賀川豊彦が校長を務め、杉山元治郎、片山哲、井伊誠一らキリスト者も講師となって支援した。のちにそれは農民福音学校として展開していった。

五 敬和学園の発足・敬和学園高校の開校

五港から始まった日本のミッション・スクールの中で、新潟の学校はいずれも短命であった。しかし、明治・大正期のキリスト教学校の再開を願う祈りが重ねられていた。第二次世界大戦後にふたたび自由が回復され、日本国憲法や教育基本法により新しい日本が形成されていく中で、キリスト教学校を再興しようという熱意と祈願は、新潟の澤田義方や新発田の井伊誠一らに見られたが、まだ機は熟していなかった。

一九五六年にジョン・モス宣教師が新潟に着任したのちに、モス宣教師夫妻と東中通教会と新潟教会の牧師と有力信徒の

間で、キリスト教の教育機関の設置が検討された。一九六三年三月に泉谷重義らによって新潟朝教会が発足した折に、大阪女学院の西村次郎院長を迎えて、学校設立の祈りがささげられ、同年一月に新潟キリスト教主義高等学校設立準備委員会が発足した。一九六七年一月には高等学校の校名を「敬和学園」とし、初代校長を日本聖書神学校教授の太田俊雄と決定した。「敬和」は「神を愛し、隣人を愛する」（マルコ福音書一二章）というイエスの教えに由来するが、太田俊雄は、それを日本的文脈で「神を敬い、隣人と和する」に置き換えた。

同年八月には新潟市から新潟開港一〇〇周年事業の一環として太夫浜の土地が提供され、ドイツ福音教会からの協力資金三五〇〇万円と北米諸教会から協力資金三六〇〇万円も送られてきて、国内の募金活動で二億円以上集め、日本基督教団の決議により発足し、法人は当初は明治学院の支援を受けた。

こうして敬和学園高校は、一九六八年四月に「敬和愛人」をモットーとして開校した。以来、キリスト教に基づく一人ひとりを大切にする人格教育、英語教育と国際的視野に立つ教育、労作教育と寮教育を柱として教育を展開している。

六 敬和学園大学の設立

太田俊雄は、高校創立時から「学園」構想を抱いていたが、

学園開設は当初は夢のような話であった。それが実現へと動き出したのは、敬和の教育に根ざした四年制大学のビジョンが共有されたことによる。一九八〇年に大学設立準備委員会が発足し、一九八六年一〇月の理事会・評議員会で、敬和学園大学設立が議決され、大学設立準備委員会が発足した。高校創立二〇周年を迎えた一九八七年六月に大学設立準備室が開設され、設立認可に向けたカリキュラム編成や教員組織編成などの準備作業が進められ、募金活動が始められた。一回目の申請が受理されず、陣容を入れ替えて一九八九年一月に第五代理事長として後宮俊夫牧師（元日本基督教団総会議長）が就任し、同年二月に学長予定者として北垣宗治同志社大学文学部教授が就任した。大学設立準備室は人員を補強して基金の募金を集めたが、大学創設費の約二六億四〇〇〇万円のうち、新発田市から約一二億円、聖籠町から約四億五〇〇〇万円、新潟県から六億円の支援を受けて大学が発足した。

教育理念として「真理は人間を自由にする」（ヨハネ福音書八・三二）というリベラル・アーツ教育の精神に基づき「福音主義キリスト教の精神に基づく自由かつ敬虔な学風の中で真理を探究するとともに心の教育を実践し、国際的教養豊かな良心的人材を養成することを目的とする」（学則第一条）を掲げ、英語英米文学科と国際文化学科の二学科（入学定員各一〇〇人）で構成された人文学部の単科大学として開学した。

七 大学教育の基盤形成

北垣宗治学長時代（一九九一～二〇〇二年度）に、敬和学園高校の「労作」を「ポランティア」として継承し、キリスト教主義教育の三つの柱として一年生全員に出席を求める「キリスト教主義」「チャペル・アセンブリ・アワー」「ポランティア論」を定めた。一九九三年に全国で初めてポランティア主事（現コーディネーター）を置き、一九九八年に学内にポランティア・センターを設置した。ロソフスキー教授のリベラル・アーツ教育論に基づくカリキュラム・ポリシーを導入し、キリスト教主義リベラル・アーツ教育の土台を築いた。二〇〇二年には教育実践に基づき教育理念を現代化して「キリスト教主義に基づく自由かつ敬虔な学風の中でリベラル・アーツ教育を行い、グローバルな視点で考え、対話とコミュニケーションとポランティア精神を重んじ、隣人に仕える国際的教養人を育成します」というミッション・ステートメントを定めた。こうして、「キリスト教主義」による人間教育、「国際主義」と「地域主義」による専門教育という三つの教育理念を明確にした。また、各種のインターンシップを始め、共同研究の場として人文社会科学研究所を開設した。その間、日本私立大学連盟「私立大学の自己点検・評価に向けて」に基づいて一九九四・九五年度、一九九八・九九年度に自己点検・評価を行い、二〇〇二年度に大学基準協会方式

一律四割カットして学びやすくし、五五歳以上のシニア入試制度やバドミントン、アーチェリーなどを強化してスポーツ推薦入試制度を導入した。

第三に、二〇〇六年に新発田商工会議所・新発田市・大学の産官学共同プロジェクトで商店街の空き店舗を改装して地域活性化を目指して「新発田学術センター」を開設し、二〇〇八年に空き店舗を改装して学生と市民で運営する「まちカフェ・りんく」を開設した。さらに、地域の魅力再発見のために小説・随筆・児童文学の文学賞「阿賀北ロマン賞」を設置し、「新発田朝市十二歳市」を復活させた。また、同年にポランティア・実習施設を兼ねて社会福祉法人シャローームと共同して学内に「グルーブホーム富塚・のぞみの里」を開設した。

これらの地域社会との連携に基づいて二〇〇八年に、PDC Aサイクルの中期計画ビジョン「隣人に仕えるための地域社会への貢献として、少子高齢化と地域格差の進む時代に、持続可能な社会の担い手を育成する」を定めた。

九 地域再生・大学再生の新しい大学教育

鈴木佳秀学長時代（二〇〇九～二〇一四年度）には、地域社会でさまざまなフィールド型アクティブ・ラーニングが展開されている。それらは、新発田学術センターやまちカフェ・りんくの活動のほかに、国際インスタラクター事業、留

で自己点検・評価し、翌年に大学基準協会に加盟した。

北垣学長は「大学のある街づくり」にも力を入れ、地元の新発田市長・市議会議員、聖籠町長・町議会議員、新発田ロータリークラブ会員をノースウエスタン大学のオレンジ市をはじめ、ハーバード大学、セント・アンドルーズ大学にも引率した。そこから地元の大学支援団体オレンジ会が誕生し、新発田市とオレンジ市は姉妹都市協定を結んだ。

八 大学教育の地域貢献

新井明学長時代（二〇〇三～二〇〇八年度）には、定員割れに対する対策として、二〇〇四年に従来の二学科を改組転換、地域社会のニーズに対応して福祉系の共生社会学科（入学定員四〇人）を立ち上げ、英語英米文学科を英語文化コミュニケーション学科に名称変更して、大幅なカリキュラム改革を行った。ポインント制教員人事制度、サバティカル制度、TA制度、学長補佐制度の新設、常勤教職員が全員参加する学長選考制度改革などを次々と行った。また、学外との連携強化を中心にして、以下の三点に力を入れて改革した。

第一に、同一法人の敬和学園高校との連携を深め、高大の共通の理念形成に力を入れた。県内の県立・私立高校とは、教員の高校訪問を出前講義に改め、高校訪問は入試課の職員が専従することにした。

第二に、新しい学生層の獲得に力を注ぎ、留学生の学費を

学生国際交流理解教育、外国籍児童日本語教育支援プログラム、被災地支援「敬和ホープ」、福祉施設入居者との「ふれあいバラエティ」、長期入院児童支援「サンタ・プロジェクト」、デジタル通信・FM放送の地域情報発信活動「敬和ランチ」、「敬和スタグラム」などである。二〇一三年度から地域社会の行政や企業のトップが講義し、翌週は現場を実地見学するオレンジ会提供の「地域学」が始まった。

二〇一五年度からは、地域貢献の担い手を育てる地域再生・大学再生の新たな教育プログラムが始まる。それは学科を横断した副専攻的な「地域経営プログラム」である。一年生全員が履修する「地域学入門」、カリキュラム本体の関連科目群の学びを一定の単位数以上履修を前提にして各種のアクティブ・ラーニングを単位化する二・三年生科目「アクティブ・ラーニング演習」、三年生科目の六週間インターンシップ（組み合わせれば三カ月も可能）、問題解決学習（PBL）を旨とした四年生科目「地域学研究」で構成されている。関連科目群を含めて三〇単位以上履修すると、「ディプロマ」が出され卒業式で表彰される。このプログラムを中心として、地域に貢献する学生が、地域社会に定着していく仕組みとして、新発田市の駅前複合施設整備計画で、新発田市の新図書館に隣接して、市と大学が協働で「街づくり」を進める象徴として、大学寮を建設していく。

こうして、経験による気づきと学びをフィードバックさせて「実践するリベラル・アーツ教育」を展開していく。